

牧畜民サンブルの割礼をめぐる

新しい選択肢

中村香子

■ サンブルの人びとと割礼

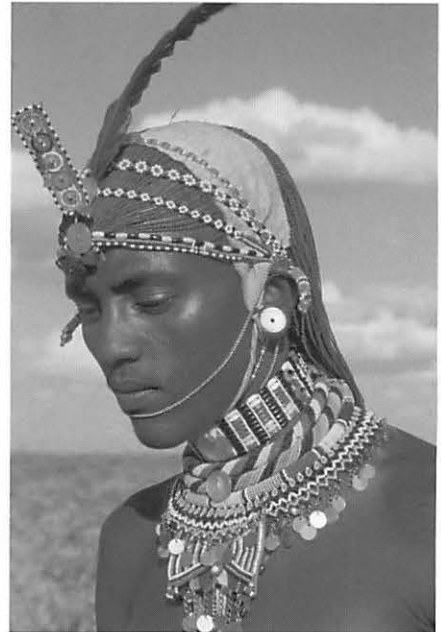
ケニア共和国中北部に居住するサンブルの人びとは、ウシを中心とする牧畜を主たる生業としてきた。彼らの社会で割礼は、人生でもっとも重大なできごとのひとつである。とくに男性の割礼は、民族をあげておこなう大規模な儀礼をとこなうため、個人にとってのみならず社会全体にとっても重要なイベントである。この儀礼は約15年に一度おこなわれ、サンブル中の割礼の適齢期(15~25歳)の少年が同時に割礼を受ける。彼らは、新しくつくられた大きな儀礼集落に移住し、数ヶ月にわたってともに暮らし、ともに歌い、ともに旅に出て、興奮や喜びをわかちあう。

サンブルの男性の生涯は三つの段階に区切られている。生まれてから割礼を受けるまでは「少年」であり、割礼を受けると「モラン」(戦士)となり、25~30歳ぐらいで結婚すると「長老」となる。「モラン」(*Imurran*)という言葉は「割礼」(*muratare*)とおなじ語幹をもつ語である。「割礼を受けてはじめて『人間』となる」と語られ、その重大さは「誕生」に匹敵する。モランには、異民族から自民族と自分たちの家畜を守るという役割が与えられており、モランになるためには強靱な精神と肉体を兼ね備えている必要があると考えられている。

割礼を直前にひかえた少年たちは、しばしば引きつけをおこすが、それは割礼を待ちこがれる焦燥感と、それが近づいていることによるつよい喜びがないまぜになった感情によるものであるという。これは、われわれの想像をはるかに超えてつよい感情であり、「壮絶な」喜びである。そして、同時に割礼を受け、ともにこの喜びを経験したもののたちのあいだには、相互に“*muratai*”と呼び合う、生涯にわたって絶えることのないつよい一体

感がうまれるのである。

長期にわたる大規模な儀礼の準備には数ヶ月がついやされる。そして無事に割礼がすむと、それぞれの少年たちが各自のための家畜を同時に屠り、遠方からも多くの人びとが集まってきて、数日にわたってともに歌い踊る盛大な祝いの場となる。しかしながら、学校教育や賃金労働が急速に普及している現在、サンブルの人びとの生活にとってこの盛大な儀礼は、美しく大切なものであると同時に、多くの犠牲を払うものにもなりつつある。本稿では、2005年におこなわれたキシャミ年齢組の集団割礼の際にみられたいくつかの新しい試みについて述べてみたい。



サンブルのモラン

■ 割礼前の苦行の旅

いよいよ割礼の時期が近づいてくると、少年たちは、炭で黒く染めた皮のケープをはおり、青いビーズの飾りを頭から背中に垂らし、後頭部を丸く剃り残す独特の髪形をする。少年の割礼の時期を決定するのは長老であるが、彼らはそのまえに、割礼をひかえた少年たちを率いて1ヶ月ほどの旅に出る。これはナイグレ(sing. *naigurre*, pl. *naigurya*)とよばれる樹脂を集めるための旅である。この樹脂は特定の樹木から採られるもので、乾燥すると漆黒でゴムようになる。少年たちは後日に割礼をすませると木製の弓と矢をたずさえて歩きまわり、これで射った鳥の剥製で髪飾りをつくってその美しさを競うが、旅で集めるナイグレは、鳥を傷つけないためにこの木製の矢の先端につけるためのものである。しかし「ナイグレを採る」というのは名目であり、この旅は「苦行」の意味合いが濃い。道中は、食べ物を乞いながら行くのだが、集落のない地域や異民族の土地も多く、少年たちは疲労と空腹に始終苦しめられる。モランにふさわしい精神と肉体の強さが備わっているかどうかを試されるのである。次に示すのは1990年に割礼を受けたモーリ年齢組のある男性がこの旅に行ったとき(1990年7月)についての語りである。この旅を語る男性はみな、熱っぽくその厳しさを語り、みな一様に誇らしげである。

ナイグレを採りに行く旅が始まったのは、7月の一番目の月が出てきた日だった。私たち少年は236人いた。(中略)ライボン(宗教的指導者)のところへ行き、祝福の祈りをうけて、山へ向かった。夜中の1時まで歩き、朝の5時まで寝て、また夜中の1時まで歩いた。歩いて、歩いて、歩いた。寝る場所もなく、毎日野外で寝ていた。動物そのものだった。空腹と戦いながら毎日、歩き続けた。

ある山が見え、あれがナイグレのある山だと言われたとき、30キロほど離れたその山に向って全員が興奮して全力で走り始めた。誰もが一刻も早くナイグレを手にしたかった。前方を歩いていた長老たちを蹴りとばすような騒ぎとなり、混乱したために、長老たちにその場で説教をうけた。そして目的の山に着いたが、ナイグレは見つからなかった。怒りで気が変になりかけた時、足元にあった小さ

なナイグレに気づいた。探していたものは象のように大きなもののような気がしていたが、石ころのように小さなものだった。

そして長老たちは火起こし棒で火を起こし、その火でナイグレを柔らかくして、皆にひとかたまりずつを配った。これを持って帰路についた。この日、月は再び一番目の月だった。自分の家のある場所まで帰ってきた。誰もが見違えるほどやせこけて、肌は乾ききっていた。(1999年採録)

この話者の割礼から15年を経た2005年のキヤマ年齢組の割礼では、新たな提案がなされた。この旅に車で行くというのである。これを聞いたときには、最初は誰もが驚いた。2005年7月なかばのことである。ロクシュ・クランの人びとが住む地域でおこなわれた長老会議の場で、警察に勤務しているひとりの長老が言った。

「最近、われわれと近隣民族のポコットとのあいだには家畜の略奪戦があり、関係は緊張している。しかし、ナイグレをとる旅の途中ではポコットの土地を通らねばならない。彼らに食料を乞い、援助を求めなければならないが、現在それは不可能である。サンプルの県知事に頼んで、バリンゴ県(サンプル県に隣接しポコットとチャムスの居住地)の県知事にわれわれが少年を連れて行くことを伝え、安全を確保する必要があるだろう。また、(われわれと良好な関係にある)チャムスは、ポコットとの戦いに負けて土地を追われた。さて、いったいわれわれは新鮮なミルクをどこで得ることができるのか?」

ロクシュ・クランには、少年たちがナイグレを採るとき、その木に新鮮なミルクをかけて清めるという習慣がある。従来は新鮮なミルクを入れた木製の容器をもって旅にでかけ、血縁関係をたどることのできるチャムスの家を訪問して、道中で酸乳になったミルクを新鮮なものと交換してもらった。彼は続けた。

「チャムスから新鮮なミルクが得られないのであれば、自分の家からもっていくミルクが新鮮なうちに、ナイグレのある山に着かなければならない。そのためには車で行く必要があるだろう!」



割礼前日に長老から説教をうける少年たち：儀礼集落にて。手前のしゃがんでいるのが少年、立っているのが長老。

この地域は、サンプルのなかでも「進んでいる」地域である。学校に通っている少年も多く、彼らは最初からこの旅には参加できないと表明していた。また儀礼を執りおこなうべき長老たちのなかにも、牧畜のかたわらに農業をしているものや給与所得のある職に就いているものも少なくない。また、この土地の少年たちの多くは飢えに苦しみながら歩くという経験をしたことがない。そんな少年たちがこの苦行に耐えられるのだろうか、誰もが内心で心配していた。しかし、この心配を言明することは自分たちの息子がそのように「ひ弱」であることを認めることになるため、誰もそれを口にはできなかつたのである。

「安全の確保と新鮮なミルクの必要性」という口実には誰もがとびついた。そして少年たちは県知事に借りたトラックの荷台に乗せられて旅に出ることになった。道中の食糧とガソリンのための費用は現金で徴収され、旅はわずか2日で終わってしまった。

これに対して、「われわれの息子は『障害者』ではない！」とこの選択を軽蔑し、従来どおり歩いて旅に行くという選択をした地域もあったが、特別な理由もなく、ロロクシュ・クランと同様に車で行くという選択をした人びとも多かった。

□ 割礼と儀礼集落

集団割礼をおこなうために人びとは、クランゴ

とにいくつかの地域集団にわかれてロロラ (sing. *lorora*, pl. *lororani*) とよばれる大きな儀礼集落をつくる。その集落の規模はさまざまだが、50～100戸前後の家が環状に並ぶ。少年の母親一人ひとりが自分の家を建て、割礼を受ける少年と儀礼を司る長老はもちろん、その兄弟姉妹や祖父母などの親族、そして家畜も一緒に移住する。

「儀礼集落は美しい」と人びとは語る。夕暮れには何百頭ものウシが騒がしいほどのカウベルの音とともに砂煙をあげて、夕日に背中を光らせながらこの大きな集落に帰ってくる。その壮大な景色をまえにして、儀礼に対する人びとの士気はますます高揚する。長老は儀礼に関するさまざまなことを決定する会議をおこなうし、少年たちはたえまなく割礼の歌をうたい、ダンスに興じながら割礼の日を待つ。

何よりも圧巻なのは、割礼の当日であろう。ひとつの儀礼集落の少年はすべて同じ割礼師によってそれぞれの家の入り口で次々に割礼を受ける。興奮がきわまり、叫ぶように歌いながら少年たちは自分の番を待つ。そして、無事に割礼が終わり、モランとなるその瞬間には、彼らはそれまで身につけていた黒い衣装を脱ぎ捨て、赤い染料で全身を染め、鮮やかなビーズの装身具を身につける。この様子はさながら、さなぎが蝶になり、いっせいに鮮やかな色の羽根ではばたき始めるかのようである。よい雨に恵まれて、家畜のための牧草が

充分にある場合には、人びとは割礼後も、しばらくこの儀礼集落に住み続けて祭りの余韻を楽しむ。

ところが、車でナイグレを採る旅に行ったロロクシュ・クランでは、前代未聞の話がもちあがった。儀礼集落をつくらずに割礼をおこなうというのである。「牛を売ったカネでつくった畑を放置して儀礼集落へ行くと、せっかく寒り始めたトウモロコシが野獣に食われてしまう。そんなことはできない」というのがその理由だった。しかし、それならば家族の誰かを集落に残して、畑を見張らせればよいだけである。従来にも、家族の通学や通勤、放牧の都合などのために、集落に留守番を残して儀礼集落に移住することはよくあることだった。

ロロクシュ・クランの人びとも儀礼集落の美しさを心から賞賛していたし、そこで感じる高揚感には胸が熱くなる思いをもっていた。しかし彼らは畑や町での仕事、子どもの通学などを考慮すると「自分は、ときおり儀礼集落を訪れて見物したいが、完全に移住することは無理である」と判断した。さらにまた、人びとが集まる祭りが続けば、砂糖や食糧、酒を調達するために多額の現金が必要となるし、そのために多くの家畜が失われることを懸念して、儀礼集落を「無駄遣いの場」と考える人もいたのである。

■ 医師による割礼

少年の割礼をめぐる新しい試みは、手術自体のやり方にもみられた。まず、2005年の割礼に先んじて、あるNGOが“One knife, one boy”(少年ひとりにナイフひとつ)というキャンペーンを大々的におこなっており、このフレーズをサンプル語で書いた看板があちこちに立てられていた。サンプルの割礼師の多くは鍛冶屋(*Ikunono*)であり、彼らは特別に鋭く研いだ小さなナイフを持参して、ひとつのナイフで儀礼集落のすべての少年を割礼してきた。このことが、エイズなどの病気の感染という観点から問題視されており、NGOは村に入って人びとを説得した。この流れを受けて、それぞれのクランが話し合いをもち、自分たちのやり方を選択することになった。

ほとんどのクランでは、NGOが大量に配布したナイフを利用した。私が同席したマストラ・クラン

の儀礼集落では従来どおりのナイフを使うことにしたが、割礼を受ける少年の母親が沸騰した湯を用意しており、割礼師は、それぞれの少年の施術前にその湯でナイフを洗っていた。この人びとの選択は、もっとも「伝統的」なやり方だった。対極の選択をしたのは、車で旅に行き、儀礼集落をつくらなかったロロクシュ・クランである。彼らは、ケニアのほかの民族であるトゥゲン人の医師に割礼を依頼した。この医師は、割礼の日に車で家々を巡回しながら手術をした。切開の方法はサンプルの割礼師と同じだったが、医師はゴムの手袋をはめており、まず少年に局部麻酔の注射をうち、NGOが用意したディスプレイのナイフで施術した。そして術後には傷口全体に消毒液をかけ、少年には痛み止めの飲み薬が渡された。

割礼の傷が癒えたあとには、それが割礼師によるものなのか、あるいは医師によるものなのかを、外見から判断することはできなくなるだろう。しかしサンプルの人びとのあいだでは、医師による麻酔薬をもちいた割礼は「注射の割礼」とよばれ、つよく差異化された。「注射の割礼を選択したものを、どうして“*muratai*”(割礼の同志)と呼べるだろうか。あの痛みを耐えてこそ、モランとして生きていけるのだ」と嘆く人びともいた。

■ さまざまな選択肢

サンプルの割礼儀礼には細かく決められた手順があり、従来は誰もがこれに従ってきた。しかし現在では、さまざまな局面でさまざまなイノベーションが起きており、新たな価値観のもとで、新たな選択肢が登場している。「自分の息子は『ひ弱』ではない」と一方で主張しながらも、もう一方では「そんな過酷なことを強いて、息子を殺す気か？」と自己に問い直す。儀礼集落に移住しないことを選択した人びとは、家畜の病死などの不吉なことが続いたときには「儀礼集落に行かなかったためだろうか」と内心で動揺していたし、逆に、移住した人びとは家畜や現金が消費されるたびに「これは無駄ではないのか？」と悩むこともあった。人びとは大きく揺れながらも自らの選択をし、また、つねにそれを評価するように迫られている。人びとがどのような選択肢をうみ出していくのか、今後も注目したい。

(なかむら・きょうこ/京都大学)